



「バルセロナは、スパークリングしている——」 変貌する街を舞台に生き、そして踊る

LYDIA AZZOPARDI

リディア・アッソパルディ(ダンサー)

輝くような笑顔、しなやかな手足、体中に、美しい緊張が漲っている。
リディア・アッソパルディ。

バルセロナで最も注目されているモダン・ダンサーを、
バルセロナ市内、ティビダボに近い自宅に訪ねた。

黒ずんだ古い建物の、年代物のエレベーターを降りると、まるでびっくり箱をあけたときのように、フラットの扉が勢いよく開いて、大きな目を一杯に見開いた彼女が、顔を覗かせた。『申し訳ないけれど靴を脱いで、これを履いてほしいの。そのほうが覚えるでしょ。ジャバニーズ・スタイルね』と、彼女が差し出したのは、毛糸で編んだ暖かい色の室内着。気さくで人懐っこい人柄に、一気に緊張がほぐれた。

リディア・アッソパルディは、スペイン人ではない。国籍を尋ねると、面白そうに笑いながら答えた。「それが、とても複雑なの。私自身は、ロンドンで生まれ育ったんだけど、父親はマルタ島生まれのギリシア人で、母親はアルメニア人。根っからのコスマポリタンと言えるかもしれないわね」幼い頃からダンスだけでなく、演劇にも興

味があり、ダンスを選ぶか、アクトを選ぶかで、ずいぶん迷ったという。たまたま15歳の頃、バレエのクラスで奨学金を獲得し、マーサ・グラハムで、クラシックバレエを学ぶ機会を得て、この世界に入った。彼女のトランティックなステージにみられる演劇性は、当時から培われてきたものなのだろう。

1977年にロンドンを出て、ブリッセルのモーリス・ベジャール・カンパニーでパフォーミングに磨きをかけ、教師としても修行を積んだ。その後バルセロナに来たのが10年前。「バルセロナの三天カンパニー」の一つで教えていた。ダンスの生徒たちは、それほど活発ではなかったけれど、純粹で、素朴で、フレンドリーだった。この街は小さくもなく、大きくもなくちょうど良い規模だと思う。カララン人は、最初はとつぱにいくけど、一度オーブンになると後は、大丈夫。そんなところは、ロンドンとも似ていたわね。でも、10年前にくらべると、今のバルセロナはスペ

ークリングしている。もっとコスモポリタンになってきたし、街自体もよりオープンになってきたわ』

彼女自身、「デスフィグラート」「クライエム」「ペルモンテ」とステージ毎にファンを増やし、コスチュームも手掛けなど、10年間で

大きスケールを広げた。

リディアは、ダンスのパートナーでもあるセスク・ジラベールと暮らしている。ダンサーとして、クリエイターとして同じ夢を見られる彼とは、ベスト・カップルだという。ただし仕事を落ち込んだときは、教いようがないことも。そんな彼女が、一番幸せを感じるのは、良い本を読んだ時や、友人と食事をしている時、そして、仕事をする必要がない時。「ステージでの成功は、嬉しいけれど、誇りや満足してしまわないのよ。本当の幸せは、健康で穏やかな生活を送ること」と、きっぱりした口調で言った。



来年発表予定のセスク・ジラベールとのコンビ4作目の準備に忙しい。
今、ダンス以外に熱中しているのは、コスチュームのデザイン、ギリシア語のレッスン。
日本にても興味があり、日本語も習いたいと思っている。
PHOTO:ROS RIBAS

CREATIVE PARADISE
—BARCELONA—